

# KITAKEI-Report

No.154  
June2022

発行：北恵株式会社 〒541-0054 大阪市中央区南本町3-6-14 TEL.06-6251-6701  
http://www.kitakei.jp/

## 工務店の約6割「値上がり分負担」

新型コロナウイルスの感染拡大やウッドショックなどで資材・建材の納期遅延が発生しています。こうした事象は、工務店の住まいづくりに様々な影響を及ぼしています。そんな中、建設職人を中心とする労働組合「全国建設労働組合総連合」（全建総連）は、元請工務店を対象にした緊急アンケート調査を実施、4月25日に「建材・住宅設備の価格高騰・納期遅延の影響に関する工務店アンケート調査」として公表しました。

調査は3月11日～4月15日にかけて、35都道府県の1097社に対して行ったものです。同調査では3月に納品された給湯設備の発注時期等について質問。「20日以内」が13.1%、「21～40日」が20.2%、「41～60日」が24.7%でした。以下、「61～80日」が3.4%、「81～100日」が23.4%、「101～120日」が9.8%、「121～140日」が0.7%、「141日以上」が4.7%となっています。納品の平均日数は66.7日、かかった最大日数は240日でした。

給湯設備や衛生設備の納品遅延による新築・リフォームの受注工事への影響については「工事を待ってもらっている」という回答が新築で36.3%、リフォームで52.1%と共に一番多くなっています。この他、「工期を伸ばした」（新築33.4%、リフォーム28.3%）、「キャンセルが出た」（新築6.1%、リフォーム7.6%）などの回答が寄せられました。

建材・住宅設備の工事原価については、2021年3月比で「かなり上がった」とする回答が53.3%と過半数を占めました。その他、「上がった」が42.7%、「横ばい」が4.0%でした。

工事原価上昇に影響している建材・住宅設備について尋ねると、構造材、合板、羽柄材・造作材など、全体的に木材が工事原価を押し上げる原因だと認識されていることが分かりました。また、お客様に提示する見積価格について質問した所、

価格転嫁状況（上）と価格転嫁ができなかった理由について

(3) 値上がり分のお客様への価格転嫁の状況	有効回答数	割合
お客様に負担してもらった	418	40.3%
一部を自社で負担（自社負担50%未満）	379	36.5%
値上がり分を全て自社で負担	151	14.5%
一部を自社で負担（自社負担50%以上）	90	8.7%
合計	1,038	100.0%

※全建総連の資料より転載

全体の58.8%が「大きな影響が出ている」と回答。

「少し影響が出ている」は38.8%で「影響は出ていない」はわずか2.4%に過ぎず、全体の9割以上が影響を受けていることが分かりました。

値上がり分の価格転嫁状況についても調査したところ、「お客様に負担してもらった」のは40.3%と、割合では最多を占めています。とはいえ、それ以外の59.7%の工務店が「何らかの形で値上がり分を負担した」と回答。割合としては、「一部を自社で負担（自社負担50%未満）」（36.5%）、「値上がり分を全て自社で負担」（14.5%）、「一部を自社で負担（自社負担50%以上）」（8.7%）となっています。

価格転嫁できなかった理由（複数回答）は「既に見積書を提出していた（既契約も含む）」が75.2%で圧倒的に多くなっています。この他、「同業他社との競争があるため」（26.1%）、「お客様に価格交渉・契約変更に応じてもらえなかった」（11.3%）といった意見も見られました。

経営への影響を見ると、売上高が「下がった」は45.1%、「横ばい」は41.1%という割合に。利益率への影響については「下がった」が64.9%、「横ばい」が31.0%、「上がった」が4.1%となっています。

受注への影響では「悪化」が49.8%、「横ばい」

が45.8%とほぼ意見を二分。「悪化した」人に理由（複数回答）を尋ねると、「お客様が建材高騰の様子をみている」が53.2%で1位でした。その他、「建材・設備等の納期時期が不確かで工期を設定できず受注を断っている」（44.4%）、「工事金額が高くなり契約が成立しない」（44.4%）という回答も大きな割合を占めました。

コロナやウッドショックといった未曾有の困難が工務店経営に悪影響を及ぼしている昨今。更なる事態の悪化を引き起こさないための取り組みが重要となります。今後、国を始めとする関係機関には住宅事業が円滑に継続できるための支援などが求められるといえるでしょう。

## 国産材利用でSDGsへ 次世代のニーズに応える家造りを

持続可能な開発目標「SDGs」への取り組みが世界中で求められています。住宅業界のみならず日本国内においても「SDGs」というワードが頻繁に見られるようになってきている昨今ですが、工務店が同目標に関与するアプローチ方法の一つとして、国産材の利活用を推進する取り組みがあげられるでしょう。

日本は世界有数の森林大国。森林面積は約2500万畝と国土面積の3分の2を占めています。このうち人工林は約1000万畝と約4割強にあたります。しかし、その人工林の半分は、主伐期である50年生を超えたもの。林野庁はこの現状を踏まえ、「資源を有効活用すると同時に、循環利用に向けて計画的に再造成することが必要」と警鐘を鳴らしています。

こうした中、国産材製材協会は4月26日、東京都内で林業の発展を目的とした講演会を開催しました。同協会は国産材の品質安定化や市場にマッチした製品製造、製造コストの削減などに取り組む活動を行っています。講演会では同協会の佐々木幸久理事（山佐木材㈱代表取締役社長）が登壇。スギの集成材はヤング係数が低いことにより、ホワイトウッドなどの集成材と比較して安く買われてしまう点について言及しました。

佐々木理事が社長を務める山佐木材㈱は、平成

元年、樹齢別にスギ丸太を購入し、それぞれのヤング係数を調査。「件数が多くないため、いつか調査機関で調べてほしい」と前置きした上で、自社が行った調査では、樹齢が増すほどにヤング係数が高まっていたことを紹介しました。その上で、「当時は80年生までしか入手できなかったため（樹齢80年で）打ち止めとなりましたが、（樹齢が）100年までいくと、今のベイマツよりも遥かに品質の高いスギ材が採れるのではないかと思う」と、自身の見立てを語りました。

佐々木理事はこれらの経緯を踏まえ、当時から「40～50年で皆伐するのが果たして良いのか」と疑問を持ち始めた」と自身の思いを披露。「木の成長が50～60年で止まることはおそらくない。ほぼ直線的に100年くらいまでは成長を続けると聞いている」と述べました。

世界的な資材高を迎えている昨今。もはや「いかに安く家が建てられるか」を追求する時代は終わったといえます。これからはSDGsの理念にのっとり、「持続可能性」に寄与する住宅づくりがお施主様に評価いただける可能性は十分にあります。国産材を利活用した住まいづくりはこうした面からも、大きくアピールできる取り組みになるといえるのではないのでしょうか。

## 連載：木造住宅の歩み（第18回）

さて、第一種換気から随分話がそれてしまいましたが、第一種換気の多くは給気と排気の両方に動力を使いダクトを経由して、空気の流れを制御しています。より確実な計画換気は実現できませんが、ダクト内の空気を移動させるには多くのエネルギーを消費してしまい、その分多くの電力を

必要とします。一般的には熱交換により熱エネルギーを回収しますが、それでも投入した電気エネルギーの方が大きいので、エネルギー消費だけの観点で見た場合は第三種換気の方が有利になります。

実際ダクトをまっすぐに施工する事はなかなか

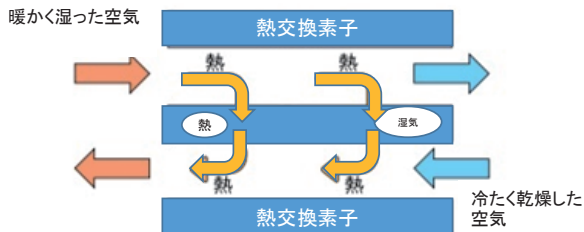
困難で、梁や柱を避ける為どうしても屈曲せざるを得ない事もしばしばです。ダクトが屈曲すると空気を移動させるにはさらに多くのエネルギーが必要となります。こうしたことから、給気だけダクトを利用したり排気だけダクトを利用するという方式も生まれています。

さらに最近ではダクトを用いず、給気口と排気

口にそれぞれ正回転・逆回転の出来るモーターを設置し、一定間隔で正逆交互運転を行い、壁厚の短い蓄熱材に熱を移動させて、逆回転させたときに風洞の熱を空気に戻すというような商品も販売されています。従来の熱交換器は熱の移動促進機だったのに対しこちらは「蓄熱放熱機」といった具合です。

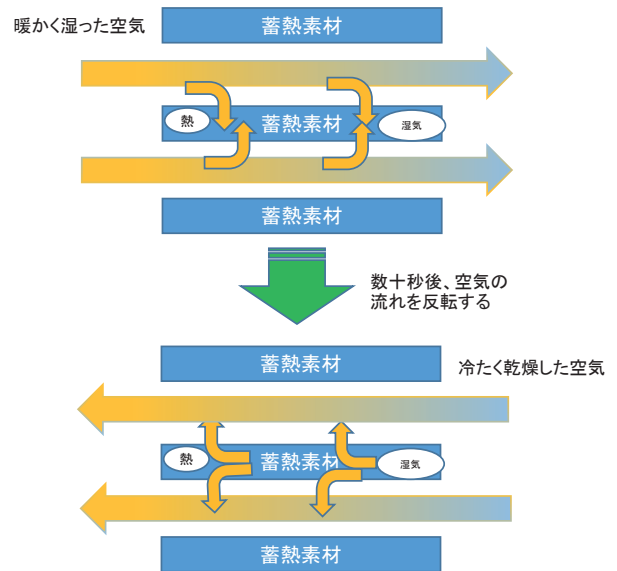
### 熱交換器の基本原理

熱伝導により、熱はより低い側へ移動します。湿気を通す膜を使うことにより、乾燥空気に湿度を与える事が出来ます。同時に湿気が持つ熱(潜熱)の移動も行います。



### 蓄熱放熱器の基本原理

温まり易く冷めやすい素材を蓄熱材として利用し、一定時間通風した後空気の流れを反転させて、蓄熱したエネルギーと湿気を戻す事で熱交換を行います。



結局どの換気方式が良いのかとなると、確実な換気を望まれるのであれば第一種換気となり、コスト重視でなければ第三種換気となるのではないのでしょうか。さらに第一種換気にはダクト方式なのか、給排両方使うのか片側だけ使うのかなど種類があり、近年ではエアコンも組み合わせて全般換気の域を超えた、全館空調と呼べるようなものまで出てきています。お施主様の中には化学物質過敏症など、室内環境において敏感な方もおられますので、ニーズに合った換気方式を選ぶ必要があります。

さて、今まで触れて来なかった第二種換気についてですが、こちらは給気側に動力ファンを設置し、強制的に空気を室内に押し込む方式です。当

然室内は正圧となり外部から空気は侵入しません。住宅には殆ど採用されず、手術室などの外部からバイキンが侵入しては困る部屋に用いられます。

次回はいよいよ、断熱の世界に入っていきます。

**お詫び**：先月号の熱交換器の説明冒頭で「段ボールを互い違いに貼り合わせただけの非常にシンプルな構造の熱交換器～」は、「段ボールのような素材を～」の間違いです。すみません。いくら何でも、段ボール紙を貼り合わせただけのはずはないですから…。

【つづく】 北恵レポート担当 O

キタケイの提供する2つのプライベートブランド  
 環境・ぬくもり・素材をテーマとした各種住宅資材 “ スプロートユニバーサル ”  
 天然木にこだわったフローリングや壁材 “ リラクシングウッド ”  
 企画・製造から販売までトータルにプロデュース、心からご満足いただける住まいづくりを  
 バックアップします。

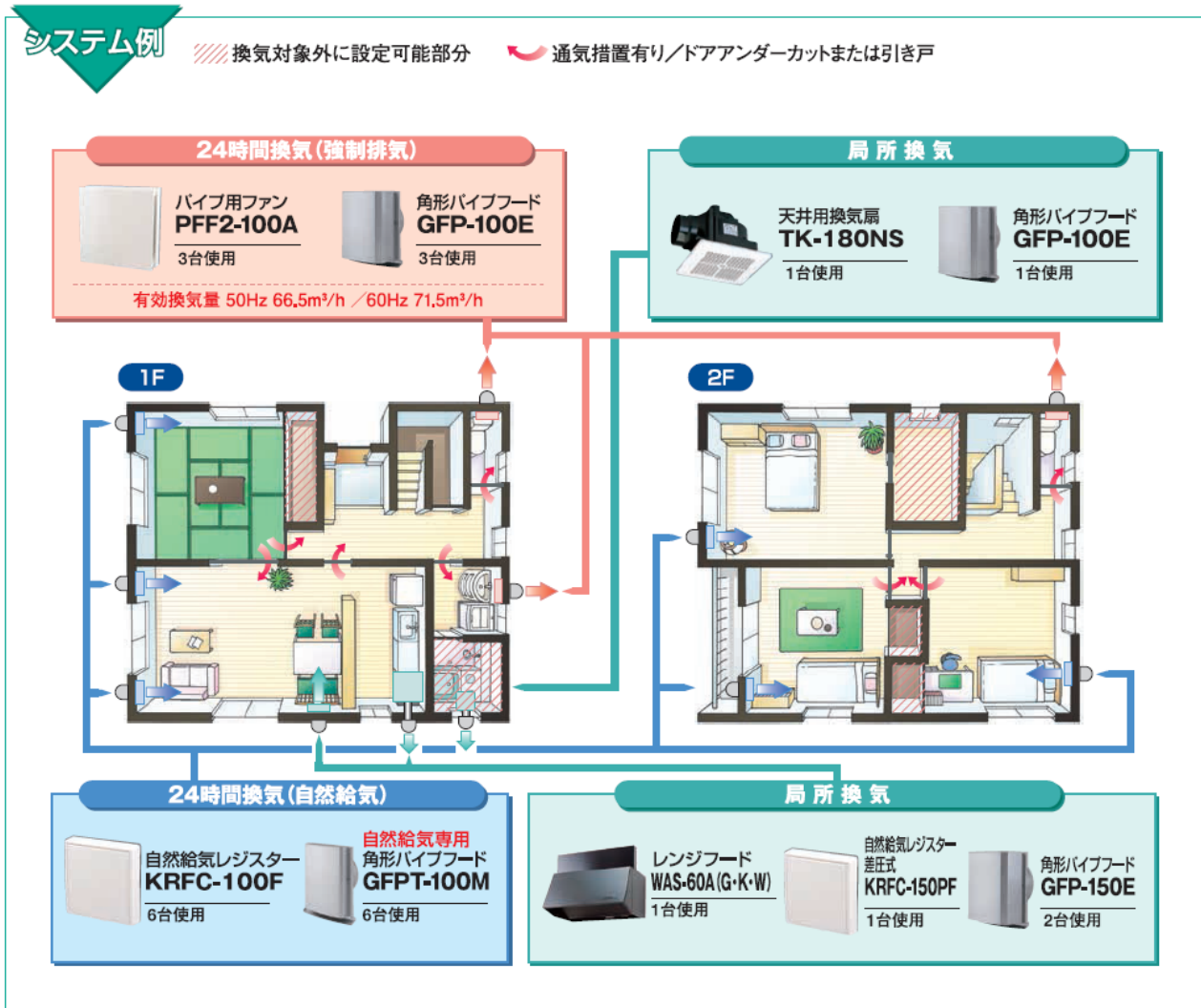


www. sprout-univ. com

戸建 第3種(自然給気+強制排気)

# 第3種自然給気・ 強制排気ダクトレスパイプ用ファン 24時間換気システム

(換気回数0.5回以上/h)



※有効換気量とは、パイプフード、ダクトの圧力損失などを考慮した風量です。  
 ※塩害の発生しやすい地域および工業地帯では、別途全面塗品またはプラスチック製をご使用ください。